

ぼんぼりワルツ

登場人物

ひな子

雛

貴子

義男

花子

次郎

明美

信子

夏江

政春

橘

川上

由香

男

桃子

桜子

あきら

春光

高月

老人

*引用曲

『うれしいひなまつり』作詞 サトウハチロー

作曲 河村光陽

三月三日。ひな子の部屋。

ひな子の親友・貴子とその弟・義男がお茶を飲んでいる。

お相手をしているのは雛人形の雛。

姉弟の傍らには大きな風呂敷包み。

義男 いやあ、ひな子さんのお宅は実に気持ちがいいですねえ。余計なものなどにひとつなく、清潔でさっぱりしている。

雛 なにもないのは貧しいだけである。

義男 想像していたとおりですよ。住む人の心根が部屋にも表れるんだなあ。それに比べてうちの屋敷なんか、無駄に広いのをいいことに外国の家具やら美術品やらをごちゃごちゃと飾るわ並べ立てるわ……。あれでは納戸で暮してるのとおんなじだ。毎日息がつまります。

雛 私もお納戸の中にいたときはそうだった。

貴子 文句があるならお父様に直接お言いなさいよ。

義男 姉さんは馬鹿ですか？ あのお父様にそんなくだらないことでたてついて、一体どんな得があるっていうんです。

貴子 くだらないってことはわかってるのね。

義男 僕は貯金をしているんですよ。大事なわがママを通すために、今はおとなしくお人形のように「はいはい」と言うことをきいているんです。

雛 (面白そうに真似して)「はいはい」。

貴子 なあに？ 大事なわがママって。

義男 ひな子さんとの結婚に決まっているじゃありませんか。

貴子 (鼻で笑って) また性懲りもなくよくもまあ……。

義男 会社を継ぐことは承知しましょう。ほんとうは源じいのような庭師になりましたかったのですが、やむを得ません。あきらめます。はからずも長男に生まれてしまった宿命です。ああ……僕も女の子に生まれてきたかった。そうしたらこんな

ふうに、他愛のないおしゃべりをしながらひなまつりを楽しく祝うことができたのに……。はっ！でも女の子になったらひな子さんと結婚できなくなってしまう！

雛 貴子の弟は油をなめたようにぺらぺらとよくお口が回るなあ。

貴子 うるさいでしょう？ ごめんなさいね。

義男 姉さんが姉さんじゃなくて兄さんだったらよかったんだ。そうしたら僕はのんきな次男坊として、ひな子さんと自由な生活を……

貴子 私が男に生まれていたら、女学校でひな子と友達になることもなかったし、あんたがひな子と知り合いになることもなかったんじゃない？

義男 うう……。なんてままならない人生なんだ……。

そこへ調子つばずれの「うれしいひなまつり」を唄いながら、小さな皿を手にしたひな子が現れる。

ひな子 ♪五く人ばくやくしの笛太鼓く 今日くはたのしいひなまつりく。

義男 素敵です、ひな子さん。実に独創的な歌い方だ。

貴子 音楽の先生が匙さしを投げたのよ。「あなたはもう自由にお歌いになってよらしい」って。

雛 ほう。

ひな子 お待たせしましたー。

義男 お嫁さんになってください。

ひな子 (意に介さず) ひな子特製ひなあられです。

貴子 ああうれしい。私大好きなの、ひな子の作ったひなあられ。

義男 僕もひな子さんが大好きなんです。

ひな子 義男ちゃんも食べて？ 今年いは炒り大豆を入れてみたの。

貴子 上手こしらに拵こしらえるわよねえ。

ひな子 あら、簡単なのよ？ 干したごはんを油で揚げて、砂糖蜜をからめるだけだもの。

雛 ただその干し飯いを鳥どもに狙われるのが厄介でならん。

貴子 雛さま、がんばってましたよね。雀やらカラスやらを大きな声で「下がれ下がれ！」って追い払って。

雛 ひな子はお仕立ての仕事で忙しいからなあ。

義男 そんな苦労はさせませんから！

ひな子 (雛に) ありがとうございます。助かっちゃった。

雛 女子おなごの身代わりとなって厄や穢けがれを祓うのが私の務めだ。大儀たいぎない。

義男 ……ひな子さん……。

貴子 義男うるさい。これいただいたら帰りなさい。荷物ありがと。お父様うち以外の家のみんなによろしく。

ひな子 あ、少し包んであげようか？ 雛さまが鳥から守ってくれたおかげで、あられたくさん出来たから。

義男 ……僕の求愛こらいは悉すく、清々すがすがしいほど受け流されてしまうようなので、少し切り口を変えますが……。

ひな子 ああ、ごめんね。つつい……。義男ちゃんのそれ、なんだかもう聞き飽きたっていうか、冗談もほどほどにっていうか、いつになったら目が覚めるのかしらっていうか。

義男 ……。もう、そのくらいで。

ひな子 正直つき合いきれないっていうか……。

貴子 (惚れ惚れと) たたみかけるわねえ。

義男 ……そんなむごいことをすらすらと笑顔で言える率直なところがたまらないんです……。それはさておき、ひとつ質問が。

ひな子 はい、なあに？

義男 ひな子さんのお部屋に初めてお邪魔できたうれしさで、うっかり確かめ損なってしまうんですが、さつきから普通に我々の会話に参加している泰然たいぜんとした

あの方……。

ひな子 (雛を見やっつてから) 雛さま？

義男 ……人形ですよね？

ひな子 (にっこりと) そうだけど。

義男 ……笑顔がまぶしいです……。

貴子 うちの雛人形も雛さまみたいにお喋りしたりお手伝いしてくれたりすればいいのになあ。やっぱり愛情のかけ方がちがうのかしら。

雛 ほんの恩返しよ。ひな子は命の恩人であるから。

貴子 (義男に) 空襲で焼かれたお家の中から助け出したんですって。

ひな子 お着物がすっかり焦げちゃっててね。こんな粗末な衣装になっちゃったのは本当に申し訳ないんだけど。

雛 なんのなんの。ひな子が詠^{あつら}えてくれたこのおべべ、動きやすうてたいへんよろしい。

義男 ……納得できない……。

貴子 まあ私も最初はちよつとびっくりしたけどね。

義男 人間の僕が子供扱いしかしてもらえないのに、人形の方はひな子さんからそこまで大事にされているなんて……。

貴子 ……そっち？

義男 (膝詰めで雛に) お人形のくせに喋ったり動いたり大き過ぎたりすることは目をつぶります。その代わりに、ひな子さんからそそがれるその愛情を！ 少しでもいいから僕に分けてください。

雛 喋ったり動いたり大きくなったりするのは、その方がひな子を助けるのになにかと都合がよいというだけのことよ。目なぞつぶってくれずとも構わん。

義男 (雛にとりすがり) ひな子さんに振り向いて欲しいんですう。

雛 あいにく男の子のお守りは専門外でな。五月人形か鯉のぼりに助けを求めてみてはどうだ？

義男 鯉のぼりに恋の相談なんて駄洒落みたいでイヤだあ！ (と悶える)

貴子 (ため息) ちよつと口数は多いけど、勉強もよくできるまともな子なのに。ひな子のことになるとどうしてこう分別^{ぶんべつ}がなくなっちゃうのかしら。

ひな子 お貴ちゃんだってあんまり人のこと言えないじゃないの。身ひとつで転がり込んで来たかと思ったら……、

貴子 だって無理やりお見合いさせられそうだったんだもの。義男も見たでしょ？
狛犬こまじぬが背広着てるみたいなの写真！

ひな子 今度は遠い町まで好きな人を追いかけていこうだなんて、それが分別のある人のすることって言える？

貴子 あの人には私が必要なのよ。

ひな子 義男ちゃんみたいな一時いつときの気の迷いってことはないの？

義男 僕は本気ですよ！

貴子 私も本気よ。親に反対されようが勘当されようが、一緒にいたい。もう決めたの。

ひな子 お貴ちゃんが一度言い出したらきかないのは知ってるけど……。

義男 姉さんは馬鹿ですよ。コブつきの男やもめとわざわざ苦労をともにしようだなんて。もはやお貴ちゃんじゃなくてお馬鹿ちゃんです。

雛 お相手の方には子どもがおありか。女の子か？

貴子 花子ちゃんていうのよ。まだよちよち歩きでね。

雛 それはそれは愛らしからう。

貴子 本当は今日いっしょにおひなまつりのお祝いをしてあげたかったんだけど。

義男がもたもたしてるから。

義男 姉さん、今ならまだ間に合うよ。お父様によく謝って、納戸のようなあの屋敷に帰りましょう。第一、弟の純情な恋心を利用して、家出の荷物を運ばせるような腹黒い人間が継母ままははになるのでは、その女の子がかわいそうだ。

貴子 お料理もお裁縫も、ひな子みたいに上手には出来ないけど、とにかくね、うんと可愛がってあげるの。もう淋しい思いなんてさせないわ。

雛 それがいい、それがいい。

ひな子 そんな顔されちゃあ、もうなんにも言えないわね。

義男 ひな子さんはものわかりが良すぎます！ それも魅力のひとつではありませんが、今だけはなんとか言ってみてください！ 運転手つきの車で銀座へ買物に行くような姉さんに、貧乏暮らしが務まると思いますか？

ひな子 でもなにが本当に幸せかは、本人じゃないとわからないから。

義男 泣くことになってからじゃ遅いんだ！

ひな子 その時はその時で、

義男 そういう大らかなところも好きですけど今は……。

ひな子 義男ちゃんとあたしと雛さまで、助けてあげればいいじゃない。

義男 ……そこにはいつか僕と結婚してくれるという意味も含まれていますか？

ひな子 ううん。全然含まれてない。

貴子 ありがとうね、ひな子。義男もありがと。心配しないで。姉さん必ず幸せになるから。

ひな子 絶対よ、お貴ちゃん。約束よ？

貴子 (笑顔で力強く背いてから義男に) 今度姪っ子に会いにいらっしやい。食べちゃいたいくらい可愛いから。あんたなんかきつとメロメロよ？

義男 僕はひな子さん以外の女性に心を奪われたりなどしません。それに、家出の手伝いをしたなんてことがバレたら、二度と外には出してもらえないかもしれないな
い……。

貴子 やりかねないわね。あのお父様なら。

雛 では貴子とも義男ともしばしお別れか。淋しくなるなあ、ひな子。

ひな子 そうね。

義男 ……ひな子さん。今からデートしてください。

ひな子 誰と？

義男 もちろん僕とです。それ言わないと伝わりませんか。

ひな子 ごめんなさい、義男ちゃん。今日はお仕立ての仕事がまだ残っていて……。

義男 近くの神社に縁日が出ています。今日はひなまつりですから、そこでなにか綺麗で可愛いものを買いましょう。一緒に金魚をすくきましょう。

貴子 無理言わないの。ひな子困っているじゃない。

義男 僕はこの先、姉さんがいなくなつて灯りが消えたようなあの家で、お父様の顔を窺いながら暮らさなければなりません。その暗くつらい毎日に耐えられるような思い出をください。デートしてください。ついでに結婚してください。

貴子 調子にのらない！

雛 デートとやらには私が参ろう。

義男 ……結構です。男の子のお守りは専門外では？

雛 先ほども申したように、女子の身代わりとなって厄や穢れを祓うのは私の務めだ。

義男 僕は厄や穢れなんかじゃない！

雛 さあさあ、楽しい思い出を作りに参ろうぞ。(と強引に連れて行く)

義男 ひな子さーん！

雛と義男、退場。

貴子 大丈夫かしら？ お雛様、外をうろついて。

ひな子 大目にみてもらいましょ。今日はおひなまつりだし。

貴子 困った弟だけど、時々は相手してやってね。

ひな子 それほど悪い気はしてないのよ？ 誰かからあんなに好かれることなんて、多分一生ないと思うもの。

貴子 「好きです」の大安売りだものねえ。

ひな子 ……「姉さんがいなくなって、灯りが消えたよう」。

貴子 ん？

ひな子 そういう言葉の方が、ぐらっとくるのにね。

貴子 (思わず微笑み) まだまだわかってないのよねえ。

ひな子 そうだ。甘酒も作ってあるのよ。飲むでしょ？

貴子 あらいいわね。そうそう、ひなあられの作り方、もう一度詳しく教えて？

ひな子 持ってお行きなさいよ。まだたんとあるんだから。

貴子 可愛い娘にこの手で作ってあげたいの！

ひな子 ……もうすっかりお母さんね。

貴子 お雛様との二人暮らしもいいいけれど、ひな子も早く家族を持ったら？

ひな子 (不安定な音程で歌いながらお勝手へ)♪お嫁にいらした姉さまに♪よ
く似た官女の白い顔♪(退場)

貴子 ……だけどね、ひな子。もしもあなたに子どもが出来ても……そんな妙ちきりんな歌教えちゃ絶対ダメよ？（と後に続く）

2

三月三日。桃子と桜子の家の前の往来。

桜子とメイド姿の高月たかつきが現れる。

桜子 あの、ほんと大丈夫ですから。あたしちゃんとみんなを連れて行きますから。

高月 いえいえ、きちんとお宅の前までお迎えするようにとのお言いつけですから。

桜子 すみません。まだ全員揃っていなくって……。

高月 こちらこそ申し訳ありません。（忌々しそうに振り返り）あの電柱さえなければ……。

桜子 いや、そもそも無理ですよ。こんな路地裏にあんな大きい車入りませんで。

高月 ……埋めましょうか。

桜子 ……はい？

高月 あの電柱を埋めてしまえば、リムジンだつてなんとか通れると思います。會長からお役所に圧力をかけていただきますし。そうすれば桜子さまのお宅の前まで……。

桜子 そんなことでお役所を動かすのやめてください。……でも、會長さんで……そんなにすごい人なんですか？

高月 よく知りませんが、あんなに大きな車や御屋敷をお持ちの方なら、それぐらいのことはお出来になるのではないかと。

桜子 おばあちゃんの知り合いですよね？

高月 私はただ、みなさまを失礼のないようお迎えするようにとだけ。

桜子 ……ちよつと呼んでみますね。（袖に向かって顔をつつこみ）ひいちゃん！
まだあー？

間。

桜子 (戻って来て) ……まだだそうです。

高月 お待ちいたします。

桜子 えっと……あたしと姉と、たぶん全部で五人なんですけど、大丈夫ですか？

高月 お友だちをたくさんお連れになってくださいとのことですので。

桜子 ひなまつりのパーティーなのに、男の子も呼んじゃったんですけど……。

高月 問題ありません。

間。

桜子 あの……守口さん、でしたっけ？

高月 高月です。

桜子 (動揺) あれ？ どっから出たんだ守口って。失礼しました。えっと……すみません、なにを訊こうとしたか忘れちゃった……。

高月 なにか緊張なさってます？

桜子 はい……。なんだか妙な……。

高月 困ります。

桜子 ……はい？

高月 みなさんに今日一日思う存分楽しんでいただくのが私のお役目ですから。

桜子 ……わかりました。(ポケットの携帯が鳴る) あ、ちよつとすみません。(出て) あ、あきらちゃん？ 今どこ？ ……えーなんで？ 手ぶらでいいって言っ
たじゃん！ (話し口を押さえて高月に) いいですよね？

高月 (肯く)

桜子 (電話に) お迎えの人待ってるんだよ？ ……いや、わかるけどさあ。……うん……。まあそれがあきらちゃんのいいとこだけ……。じゃあちよつと待って。(高月に) あのー、会長さんはどんなお花が好きですか？

高月 さあ。私、雇われてからまだ日が浅いもので。

桜子 (電話に) わかんないって。

高月 (大声で電話に向けて) どうぞほんとにお構いなく！

桜子 いいから早くおいでってば。……えー。……すみません、高森さん。

高月 高月。

桜子 ……さんの、好きなお花は。

高月 私ですか？

桜子 どうしても気持ちだからって。

高月 ……朝顔ですかね。

桜子 ……。(電話に) 聞こえた？ ……うん。……うん。……そうだよ。今三月だもんね。

高月 ひまわりも好きですけど。

桜子 ……泣くことないじゃらん。ね、泣かないで。……うんうん。いいよいいよ、それでいいよ。気持ちでしょ？ あきらちゃんのこと。……はいはい。じゃ待つてるから。急いでね。

桜子、電話を切って深いため息。

高月 デリケートなお友だちですね。

桜子 そうなんです……。ただもう一人、もつとデリケートなのが……。(携帯が鳴る) あ、もう一回すみません。(出て) はい。お姉ちゃん？ 春くんどうした？ ……ほんとに？ やった、作戦大成功だね！ じゃ早く来て。お迎え、すごいよ。来てるよ。霊柩車のでっかいのみたいな。……今、花屋にいるって。うん。ひいちゃんもまだ出て来ない。……そうだよ！ まだ誰もだよ！ だから早く……。そんなのこつちついてからでいいでしょ？ ……そうだけど……。わかったよ。(高月に電話を差し出し) あの……。姉が遅れたお詫びをしたいって。

高月 必要ありません。

桜子 ……(電話に) いいって。謝らなくっても。とにかく早くね！ ダッシュユダ

ツシユ!

桜子、電話を切って深いため息。

高月 律儀なお姉さまですね。

桜子 律儀というかマイペースというか……。

そこへ小さな花束を手に、女の子らしくおめかししたあきらが走ってやって来る。

あきら 遅くなってごめんなさ〜い!

桜子 あ、来た来た!

あきら ほんとはおリボンかけてもらおうかと思ったんだけど、桜子が「急いでね」って言うから……。

桜子 うん。でかしたよ。あ、マスカラ落ちちゃってる。

あきら うそ! やだ!(と、あわててコンパクトを取り出し、高速で化粧を直す)

桜子 (高月に) 幼なじみのあきらちゃんです。

あきら (向き直って百点の笑顔で) 今日はお招きありがとうございます。

高月 ようこそお越しくございました。

あきら 高森さん、ですよ。(花束を差し出し) これ、ほんの気持ちですけど。

高月 (受け取って) お気遣い恐縮です。高月です。

あきら ……ひどい桜子。嘘教えたのね? あたしのことかっいで笑い者にしようだなんて…… (みるみる涙目になる)。

桜子 ちょっと間違えたただけだってば。誰も笑ってなんかないでしょ?

あきら こういうさりげないイジメが一番こたえるんだから〜 (泣く)。

桜子 ああほら、せっかくお化粧直したんだから……。

あきら ひなまつり楽しみにして来たのに〜。お店の手伝いだって抜け出して来たのに〜。

高月 困りますねえ。みなさまには楽しんでいただかないといけないのに。
桜子 (空気を变えようと) あ! あきらちゃん、明日誕生日なんですよ?

高月 それはおめでとうございます。(と、あきらにもらった花束を差し出す)

あきら ……ありがとうございます……。 (花束を受け取り、その可憐さに慰められ)

お花、きれい……。

桜子 あきらちゃんはきれいなものが大好きなんです。

高月 あきらさまとおっしゃるから、てつきり男性の方だと思いました。

あきら (もじもじと) 心は女の子なんです。

桜子 そうなんです。心と見た目は……。

高月 ……さようでございますか。

そこへ桜子の姉・桃子が現れる。

桃子 桜子、お待たせー。わあ、あきらー。今日はまた一段とかわいいねー。

あきら ありがとうございます。桃ちゃん。

高月 桃子さまでいらっしゃいますか? 本日、みなさまのお世話係をいたします

高月と申します。

桃子 あーすみません遅くなりました。ちよつとひきこもりがちな近所の友だちを
引っ張り出すのに時間がかかっちゃって。

桜子 で? 春くんは?

桃子 (辺りを見回し) あれえ?

あきら うそ! 今日、春光っちゃん来るの?

桜子 言っってなかったっけ?

あきら 聞いてないわよ。

桃子 春光く。どこ行つた?

まったく似合わない華やかなワンピースに身を包み、濃い口紅をつけた春光
がよろよると現れる。

春光 ……もう終わりだ……。

桃子 ああ、いたいた。

春光 ……でっかい霊柩車が俺を迎えに来て……。

あきら 春光ちゃん……？

春光 みんなも俺なんか死んだ方がいいと……

桃子 思っでないし、あれは霊柩車じゃなくてリムジンだから。火葬場なんかじゃなくて楽しいところに行くんだよ？ もっとキャピキャピしろ、キャピキャピ。

桜子 (クールな目で春光を見つめている高月に) えつとですね、春くんは失恋のショックから、自分のことが死にたくなるほど大嫌いになっちゃったみたいで。

桃子 だったら自分じゃないみたいになればいいんじゃない？ って。ね？ で、どう？

春光 うん。鏡に映った今日の俺は、確かにいつもの俺じゃない。

桃子 ちょうどいい機会だと思って。ひなまつりのお呼ばれだもん。女の子の格好をしていくのはこれっぽっちもおかしいことじゃないでしょう？

桜子 さすがだよ、お姉ちゃん。あたしにそんな説得絶対ムリ。

桃子 春光の春！ 桃子の桃の節句！ ほら。主役じゃんあたしたち。一緒に楽しく盛り上げようぜ！（と春光の肩を力強くどつく）

春光 (痛みに耐えつつ) サンキュー桃子……。

桜子 (高月に) というわけなんですけど……かまいません、かね？

高月 ええ。ひなまつりのパーティーをお楽しみただけさえすれば。

あきら ……春光ちゃん……。

春光 ああ、あきら。ひさしぶり。

あきら う……うん。ひさしぶり。

春光 (あきらのいでたちを見てまた表情が暗くなり) ごめん……。ワンピースかぶったな……。

あきら いいのよそんなこと。……そのコサージュ、春光ちゃんらしくとって
も素敵。

春光 ……。俺らしい……？

あきら あ！ うそうそ！ なにその格好！ 春光ちゃんじゃないみたい！

春光 （やや安堵の表情を浮かべ）……そうか。

高月 （一、二、三、四、五、と自分も含めた人数確認をしながら）みなさんお揃いのようなので、早速ご移動願います。

桃子 はい！

桜子 はあ、やれやれ。

春光 ……スカートって、股がスースーするな。

あきら そこがいいんじゃない。

と口々に言いながら全員退場。

しかしすぐさま桜子が走って引き返してくる。

桜子 いけねいけね。

舞台を横断して反対の袖に顔を突っ込み

桜子 ひいちゃん！ もう行っちゃうよー！

3

三月三日。和菓子屋「あかり堂」の店内。

上手奥が和菓子を作る作業場と住居。下手は対面販売のできる店先。

甘味処となる店内には、数組の机と椅子。

そこに三角巾とエプロンをつけた花子と雛。子どもをおぶってねんねこを羽織った八百屋の夏江がいる。

花子はお客を送り出しているところ。

花子 ありがとうございます。

雛 またおいでなされ！

夏江 (雛に) それで？ 菱餅の色の意味ってなんなの？

雛 赤は厄を払う「桃」を意味してな、白は穢れのない「雪」、緑は大病のないよう薬にもなるヨモギの「草」を表しておる。

夏江 なるほどね。子どもの健やかな成長を願う思いがこめられてるってわけだ。

雛 上から、赤、白、緑の順になっているのはな、地上には桃の花が咲き、大地には雪が残り、その雪の下には新しい緑があるという春の情景に見たてているそう
な。

夏江 へえーっ。さすがはお雛様、詳しいわねえ。

雛 昨晚、テレビで見て覚えた。

花子 雛ちゃん、テレビ大好きだもんね。

雛 (肯き) 山口百恵という若い娘、あれはなかなかみどころがある。

夏江 あらそう。じゃこれからますます売れちゃうんだ。

花子 いいの？ 夏江さん。こんなところで油売ってて。

夏江 あら、お邪魔？ まあそうよねえ。和菓子屋さんは今日が書入れ時だもんねえ。じゃ注文するわ。甘酒ちょうだい甘酒。あ、本物のお酒でもいいけど。

花子 大ごとにならないうちに帰ったら？

夏江 いいから甘酒持つてきて！ あらやだ。あたしお財布持ってないんだった。店からそのまま飛び出してきちゃったもんだから。花子さん、ツケにしといてくれる？

花子 おごるわよ。甘酒の一杯くらい。(と準備にかかる)

夏江 あら、ごちそうさま。

奥から主人の「おーい、ちょっと手伝ってくれ！」という声。

花子 はーい。

雛 私が行こう。(奥に向かつて) いま参る。(とあわてる様子もなくしずしずと退場)

夏江 珍しいじゃない。お雛様までアルバイト?

花子 明美さんおなか大きいでしょう? 人手があつた方がいいかと思つて連れてきたちやつた。(夏江に甘酒の入つた湯呑を渡し) はい、どうぞ。

夏江 いただきます。(すすつて) あーあつたかい。

花子 (背中の子どものをのぞきこんで) フフ。よく寝てる。

夏江 こんなかわいい子どもがいるつてのに。なに考えてんだか。

花子 いいだんなさんじゃないの。愛想もいいし優しいし。

夏江 あれは優しいんじゃないやらしいつて言うの。花子さんも気をつけてね。子持ちとはいえ独身なんだから。案外ねらつてるかもよ?

花子 そんなことあるはずないでしょ。

夏江 色目使つたらひっぱたいてやつて。

そこへ仏具屋の信子が入ってくる。

信子 こんにちは。(夏江に気づいて) あら、八百政さん。配達?

夏江 家出よ、家出。

信子 なに? 夫婦ゲンカ?

花子 こんにちは。今日はなにを。

信子 もう電話で頼んでる。

花子 そうですね。(奥に) 次郎さーん! 信子さんお見えですけどー。仏具屋さん
のー。

信子 毎年ひなまつりはあかり堂のお赤飯つて、うちは昔から決まつてんの。(夏江に) で? なにが原因?

夏江 それがさあ……。

奥から店主の次郎が顔を出す。

次郎 信ちゃんごめん。もうちよつと待てる？

信子 いいわよ。ちよつと早く来ちゃったし。忙しそうね。

次郎 急に大口の注文入っちゃってさ。あんなでつけえ会社がなんだってまたうちみてえなちゅちええ和菓子屋に注文よこすんだかさっぱりわかんねえんだけど、まあ、ありがてえちゅちゅありがてえけど、今、かみさんこれだろ？（と大きなおなかのゼスチャー）

信子 そろそろでしょ？ 予定日いつだっけ？

夏江 今日なんだって。

信子 あらあら。

次郎 もうビクビクもんでさあ。

花子 初産ういざんだから少し遅れるかもしれないよ？

次郎 ま、そんなこんなで、とにかくくてんやわんやなわけよ。あ、花ちゃん。お雛様よくやってくれてっけど、みんなどうにもつられちまってなあ。

花子 「つられちまって」って？

次郎 あのお上品な身のこなしに合わせて、作業場全員お公家くげさんみたいにおっとりした動きになっちゃってよ。効率悪くってかなわねえ。ちよつと代わってくんない？

花子 （笑いながら）わかりました。

そこへ表から次郎の妻・明美が、大きなおなかをかかえながら買物袋を提げて入ってくる。

明美 ただいまー。

次郎 あ！ おまえ、そんなばんばかの腹してなにほつつき歩いてんだ！

明美 ちよつと買物。入院の準備に足りないものあって。

信子 あらー。ほんとにばんばんね。

明美 ああ、いらっしやい。

次郎 下手にその辺動きまわって、赤ん坊がコロんと出てきちゃったらどうすんだよ！

夏江 そんなに簡単に出てきてくれるもんなら苦労しないわよねえ。

花子 いいのありました？

明美 うん。かわいいの見つけた。

信子 なに買ったの？

明美 ん？ パジャマ。

次郎 持ってんだらうよ、寝巻くらい。

明美 前開きの方が便利だって花子さんが教えてくれたんだもん。あ、カメラのフィルムってまだあったっけ？

次郎 あとで見といてやつから、もう表なんか出るんじゃないぞ！

明美 だって暇なんだよー。店も手伝っちゃダメっていうし……。終わったの？ 例のお遣い物。

次郎 終わんねえよ！ だから信ちゃん待たせてんだろうが。このくそ忙しい時に氣い揉ませんな！ とにかくおとなしくじっとしてろ！

雛 (奥から出てきて) 次郎。みなが呼んでおるぞ。

次郎 今いくよ。(行きかけて) いいか？ 俺の手が空くまでくしゃみも咳も禁止だからな。どうしても動きてえ時は、ゆーっくりおーっとりだぞ？ お雛様にお行儀習つとけ！ じゃ信ちゃん悪い、もうちよいな！

次郎、作業場へ戻っていく。

夏江 あれよ、花子さん。あれが本当の優しいだんなってもんよ。

信子 ジロちゃん、乱暴なのは口だけなのよね。

明美 ああやってがみがみ言いながらいちいちトイレにもくっついてくんのかな？ やんなっちゃう。

奥から「おーい！ 花ちゃん」との声。

花子 はい！ じゃ雛ちゃん。交代ね。(と奥へ)

雛 (花子を見送ってから) おや、仏壇屋。ごきげんよう。

信子 こんにちは。

雛 また寄せてもらうからな。

信子 いつでもどうぞ。

夏江 あら、仏壇だけじゃなくて雛壇まで扱ってんの？

信子 回り灯籠見とうろうに来るのよね？

雛 (肯き) あのようなぼんぼりは初めて見た。いくら見尽くしてもちいとも見飽きることはない。

信子 本当はお盆の時だけの季節商品だけど、お雛様がいつ見に来てもいいよ。うにうって、父さんがしまわないでおいてんの。

明美 くるくる回ってキレイだもんねえ、あれ。

信子 走馬灯って言った方がとおりがいいのかしら。

明美 そう言えばあれってほんとなのかなあ。「死ぬ前に一生の出来事が走馬灯のよううに思い出される」ってやつ。

夏江 あたし見たわよ、この子産む時。

信子 あ、そう！ じゃ危なかったんだ？

夏江 ひどい難産でさあ。二、三回まわったわね。頭あたまの中で走馬灯が。

明美 えー、そんなのまわったらどうしょー。

雛 あまり脅すでない。(明美に) 案じるな。きつと母を困らせることなどない良いやややこが産まれてきおる。(と大きなおなかを優しくなでる)

信子 そうういうのわかるの？

雛 いや。だがこのくらい申して気を休めてやらんなあ。

明美 なんだ気休めかー。

夏江 もうどっちかわかってんの？

明美 ううん。産まれてからのお楽しみ。あたしは女の子がほしいんだけど、うちの人は「絶対男だ！」ってきかなくて。

雛 どちらにしても、大事なかわいいわが子であることには違いあるまい。
明美 そうよね。

表から「すみませーん」という客の呼ぶ声。

明美 はーい！

雛 私が行こう。(表に向かって) しばし待たれよ！

雛、女たちに見送られながらしずしずと優雅に退場。

明美 お茶淹れよっか？

信子 いいいい。欲しけりや自分でやるから。

明美 そーお？ じゃあ荷物置いてきちやうね。よっころしよつと。(と重そうにおなかをかかえて退場)

夏江 階段！ 気をつけなよ？

信子 で？ なんなの？ 家出の原因。

夏江 ……裏通りの美容室に、若い女の子入ったの知ってる？

信子 知らない。なに、浮気？

夏江 ま、浮気っていうかとにかく浮わつてゐるっていうか……

そこへ夏江の夫・政春が入ってくる。

政春 やっぱりここか。なにやってんだよ、店ほっぽらかして。

信子 (意味深な笑みを浮かべ) こんにちは。

政春 あ、どーもどーも。今日はお休みですか？ ああまた春らしいカーデガンが
よくお似合いで。

信子 フフ。ありがと。

夏江 あんたこそなにやってんのよ。

政春 なにって探しに来たんだよ。春坊連れていなくなっちゃうから。

夏江 配達は？ 鈴木さんとこあるでしょ？

政春 いまその途中だけど……。

夏江 ああそう！ 配達のついでに探しに来たんだ？ それも女房じゃなくて息子の方を！

政春 ちがうよ、おまえたち探すついでに配達を……（信子に）こういうのってど

う言えば機嫌なおるんですかねえ？

信子 とにかく「ついで」ってのはまずいんじゃないですか？

夏江 とつとと行きなさいよ！ あそこ遅れるとうるさいじゃない。

政春 ……なににへそ曲げてんだか知らないけど……。じゃあ……じゃ、帰りに拾

いに来るから。春坊に風邪引かせんなよ？（信子に）そいじゃどーも。（と、へ

こへこと退場）

夏江 なにが「拾いに来る」だ。人を落し物かゴミみたいに。

信子 なんだ。ご主人全然ピンと来てないみたいじゃない。

夏江 それがまた頭にくんのよ。

信子 で？ 美容室の女の子がなに？

政春 （戻って来て）おい、表なんか混んでるぞ？ お雛様、優雅に接客しててお

客さんたまってるよ？ おまえ、お邪魔してるついでに手伝ってやった方がよく

ないか？

夏江 あんたはそうやって女とみればいい顔して……。

政春 女っておまえ……。お人形さんじゃないか。

夏江 いいからさっさと配達！（と背中を押して追いだす）

政春 （押し出されながら）なんだよ、俺がなににしたってんだよ……。

夏江 まったく！ あのお調子モンが！（背中の子どもがぐずりだす）おーどし

たどした。お父ちゃんが情けなくて泣けてきたか。

信子 大きくなったね、春くん。今どんくらいだっけ？

夏江 一歳半。花子さんとこと同級生。はいはい泣かない泣かない。

信子 おなかすいてんじゃないの？

夏江 いい子だいい子だ。春光はお父ちゃんと違っていい子だよー。

信子 (店の方をのぞいて) あらー。ほんとに混んじやってるわ。あたしちよつと手伝ってくるね。(と、下手に退場)

夏江 (次第に泣き声が大きくなり) ……ダメだこりや。(奥に) 明美さーん、ちよつとお座敷借りてもいいーい？(と奥へ)

誰もいない店内。

そこへ若い女・由香が店先の方に会釈しながら入ってくる。

店内を見まわしてから、奥の作業場をのぞき、肩をすくめて適当な席に着く。続いてスーツ姿の二人の男、川上と橘が入ってくる。

橘 (由香をまっすぐに指さし) この人か？ 川上。

川上 (あわてて指さす腕を下げさせ) ちがいますよ！ どう見てもお客さんじゃないですか！ (由香に) 失礼しました……。

由香 いえ……。

川上 いいから座って！

川上と橘、空いている席に着く。

川上 橘先輩。いいですか？ 絶対に余計なことしないでくださいよ？

橘 わかってるよ。

川上 先輩がどーしても！っていうから連れて来たんですからね？

橘 わかったって。ただ、余計かどうかは俺の判断に任せてほしい。

川上 なにかしでかす気満々じゃないですか！

橘 俺はおまえのことが心配なんだよ。

川上 僕も先輩のことが心配なんですよ！

橘 (意に介さず、きよろきよろして目があつた由香に) お店の人は？

由香 ああ……。奥に声かけるように言われたんですけど、なんだかものすごく忙

しそうだったんで……。

橘 そうですか。でもまあ呼んでみましょう。(大きく息を吸ってから大声で) 花子
さー……!!

川上 (あわててその口をふさぎ負けじと大声で奥に向かって) すみませーん! 注
文お願いしますー!

「はーい」という声とともに花子が現れる。

花子 え! なんで誰もいないの? (慌ててお冷の準備をしながら) すみません、
お待たせしました。

橘 川上、この人…… (と花子をまつすぐに指さした腕をすぐさま川上に叩き押し
えられる)

花子 あら川上さん。お二人連れなんて珍しい。

川上 あ、会社の先輩で……

橘 橘右近です。川上がお世話になってます。

花子 いえ、こちらこそ。川上さんには本当によく……

橘 あちらのお客様の方が先におみえになっていましたよ?

花子 ……そうですか。ではちょっとお待ちくださいね。(と由香のテーブルへ行き)
ごめんなさいお待たせして。お決まりですか?

由香 いえ、なんにしようか迷っちゃって。(と壁の品書きを見る)

川上 (恨めしげに) 先輩。

橘 なんだよ。

川上 せっかく今、僕のことをなにかよく言ってくれそうな気配だったのに……。

橘 あの子の方が先に来てたじゃないか。マナーだろ。

川上 どうしてこんなときだけジェントルマンみたいな真似するんですか!

橘 アハハハ! 川上、おまえ面白いこと言うな。

川上 ああ、もう……。(と頭をかかえる)

由香 あれにします。じょうなまがし 上生菓子とお茶のセット。

花子 (ポケットから伝票を取り出し) 上生菓子とお茶のセットですね。

由香 ……そのパッチンどめ、かわいいですね。

花子 あ、これ？ 娘の借りてきちゃったの。

由香 お嬢さんいるんだ。

花子 (にっこり)

橘 (水を飲んでいたが) ジェントルマンだって！ アハハハ！

川上 面白くない！ どっこも！

花子 (川上たちの騒ぎを一瞬気にしてから由香に) 少々お待ちください。

花子が川上たちのテーブルに向かおうとしたところへ明美が出てくる。

明美 手え足りてるのー？

花子 大丈夫ですって。次郎さんに怒られますよ？

明美 (由香に) いらっしやいませ。

橘 (明美をまっすぐに指さし) あの人か？ 川上！

川上 (ゆっくりその手を下げさせ) ……人を指ささない。マナーはどうしたんで

すかマナーは！

明美 ああ、川上さん。毎度どうも。あら、お友だち？

川上 友達なんかじゃありません……。

橘 同じ会社の橘です。

明美 そうですか。(花子に) ご注文は？

花子 あ、まだなんです。

橘 宇治金時。

明美 ごめんなさい。かき氷、夏だけなんですよー。

橘 じゃあところてん。おまえは？

川上 ……白玉ぜんざい……。

明美 (花子に) ですって！

花子 はい。少々お待ちくださいね。

花子、奥へと退場。近寄ってもらえず残念そうな川上。

橘 (明美に) 花子さんですか？

明美 ん？

川上 (慌てて) いやあ明美さん！ おなか大きくなりましたねえ！

明美 そうなのよー。もう早く出てきてくれないと重たくって。

川上 ほら、先輩！ 明美さんはもうすぐお母さんになる人なんですよ！

橘 見ればわかるよ。どうぞどうぞ。お掛けください。(と椅子を引く)

明美 あら、いいんですか？ ではお言葉に甘えて。よっこらせっと。(腰掛ける)

川上 (独り言で) なんできさつきそれやってくれないんだ……。

明美 優しい先輩ね。

橘 そりゃあもうジェントルマンですから。アハハハ！

明美 川上さん、よく甘いもの食べに来てくれるんですよ。花子さん目当てとはい
え、ほんとにありがたいったら。

川上 いや！ 僕は別にそんな……！

明美 だーってあなた、花子さんいる日にしか来ないじゃない。

橘 花子さんというのは先ほどの？

明美 えらいのよー。二年前にご主人亡くしてね、医療事務とうちのアルバイト掛
け持ちしながらまだ小さい子ども育ててんの。

橘 なるほど。それでどんなですか？ ここでの川上は。

明美 なーんかお冷ばっかり飲んでるわねー。

橘 うーん。(と腕組みして考え込んでいたが、由香に向かって) あ、キミキミ。

由香 ? ……あたし？

橘 待ち合わせですか？

由香 いいえ……。

橘 よかったらご一緒にどうです。

由香 ……はい？

川上 なんで今、女の子なんか誘うんですか！

橘 今日が三月三日だからだよ。ひなまつりに女の子がひとりぼっちなんてよくないだろう。(由香に) さあ。どうぞどうぞ。ちよつとせまいかな。(明美に) テーブル動かしてもかまいませんか？

明美 はいはい、いくらでも動かしちゃって。ほんとにジェントルマンなのねー。

川上さん、少し見習わなきゃ！

橘 ほら川上、そっち持って。

川上 なんだかもう……。

橘と川上、テーブルや椅子の移動を始める。

そこへ信子が店先から戻ってくる。

信子 なあに？ 模様替え？

明美 やだ、もしかしてお赤飯まだなの？

信子 いいのいいの、忙しくてなによりじゃない。表の方もだいぶ落ち着いたから。

明美 手伝ってくれちゃった？ ごめんねー。

信子 ぜーんぜん。あれ由香ちゃん、なにそんなとこで突っ立ってんの？

由香 なんか、お仲間に入れてくれるって……。

信子 へー、いいんだ。あたしも入れてもらっちゃおーっと。

橘 これでよし！ さあみなさん、座って座って。

川上 ……僕もう帰っていいですか？

橘 ダメだよ！ なに言ってるんだ。

明美 そうよ。白玉ぜんざいまだ来てないじゃない。

信子 (川上に) 今日は花子さんとお話できた？

川上 だから僕は別に……！

由香 花子さんてさっきの……？

明美 そうそう。

由香 ああ、そうなんですか。やさしそうな人ですもんね。お子さんいるようにみ

えないし。

信子 もう夢中なのよね？

橘 ……ちよつと安心したよ川上。おまえの気持ち、ちゃんとみなさんに伝わってるじゃないか。

川上 これは伝わってるんじゃないかってバレてるって言うんです！

明美 だけど肝心の本人にはねー。

そこへ注文の品々をお盆に載せた花子が入ってくる。

花子 たいへんお待たせしましたー。あら。いいですねえ、にぎやかで。はい、こちら上生菓子とお茶のセットです。

由香 わあ、きれいなお菓子。

花子 あかり堂自慢の練りきりですよ。

由香 「ねりきり」ってなんですか？

明美 求肥と白餡を混ぜて練った生菓子。これ、今の時期だけしか作ってないのよ。「ぼんぼり」って名前なの。

由香 へえ、かわいい。…「ぎゅうひ」ってなんですか？

明美 いいからお食べなさいよ。

花子 こちらがところてんと、白玉ぜんざいですね。

川上 ありがとうございます。

橘 では、ひなまつりと川上の未来を祝して乾杯！（と、ところてんの器を杯のようにして飲む）。

明美 あら男らしい。

橘、器を置いて拍手。川上以外のみんなもつられて拍手。

花子 川上さん、なにかいいことがあったんですか？

川上 あ、いえ……。来月、転勤が決まったんです。

明美 えー。さびしくなっちゃーう。

川上 強いていいことといえ、橘先輩から離れられることぐらいなんですけど……。

橘 つれないこと言うなよ川上！ 俺はな、たとえ遠く離れても、おまえが結婚する時には仲人を務めてやるって心に決めてるんだから。

川上 勝手に決めないでくださいよ。そして先輩、独身じゃないですか！

由香 (菓子を食べながら) 転勤しちゃうっていうことはじゃあ…… (と一瞬、花子を見るが、突然太い声で) ……うわっ、なにこれ美味しい！

明美 そんなにー？

由香 こんなうまいもん食ったことないよ！ (周囲の注目に気づき) ……あ、あたし、上生菓子って食べるの初めてなんです。

信子 (由香に) ね？ 来てよかったでしょう？ (明美に) 甘いもの好きだって言うから。

花子 信子さん、お知り合い？

信子 時々お線香とかローソク買いに来てくれるのよね？

由香 山本由香です。

橘 おお、そういえば自己紹介がまだじゃないか川上！

川上 ……川上治です。

橘 橘右近です。

由香 右近さん……。素敵なお名前ですね。

橘 いやあ、子どもの頃はよく「うんこうんこ」ってからかわれましたよ。

由香 「橘うんこ」？ ギャハハハ！ 面白えー！ ……あ、すみません……。

明美 由香ちゃんて……。案外くだけた人なのねえ！

由香 「そのガラ悪いところどうにかしろ」って職場でも言われるので、いま一生懸命なおしてるんですけど……。

明美 だったらお雛様に習えばいいじゃない。

花子 んー。あれはまたちよつと極端すぎますけど。

由香 ……お雛様？

信子 さっきあたしの隣にいたでしょ？ 着物着たお人形さん。

由香 はあ？ アレ人形なんだ！ ここんちの？

明美 ううん、花子さんの。

花子 正確に言えば母のなんですけどね。物心ついた頃からずっと一緒にいるんで、お人形というより、もう家族の一員っていうか。

橘 ご家族はあの人形と、他には？

花子 ……母と、娘が一人……。

川上 なに落ち着いて家族調査なんかしてるんですか！

橘 おまえはなにを慌ててるんだよ。

川上 だって人形がまんじゅうを売って……

橘 そういうことだってあるだろう。おまえ、ピノキオ読んだことないのか。

川上 あれは外国の話じゃないですか！

信子 まあ日本には八百万の神様がやおよろずいるって言うし、お盆には仏様が帰ってくるし、この世の中、人間じゃないものの方が多いからね。

由香 そっか……。いや、よくわかんねーけど、とにかくすげーや。すいません、「ぼんぼり」おかわり。

花子 あ、はいはい。

花子が奥に引っ込むのと入れ替わりに、夏江が出てくる。

夏江 どうもありがと明美さん。悪かったわねえ、せつかくの新しいおむつ使っちゃって。

明美 ああ、気にしないでー。春光ちゃんどうした？

夏江 また寝ちゃった。

信子 八百政さんもこっち来たら？

由香を見て顔色を変える夏江。すぐさま信子にこっそりおいでおいでをする。

信子、「？」と思いつつも呼ばれるがままに夏江のもとへ。

信子 なに。

夏江 (小声で) あの子よ、あの子！

信子 由香ちゃん？

明美 (おなかを押さえて険しい顔で) ……あれえ？

川上 どうしました？

明美 (周囲が見守る中、険しい顔のまま) ……。

夏江 美容室の若い子！

信子 えー？ ちがうわよ。(振り返って) 由香ちゃん！ お勤め先って確か病院よね？

由香 美容院です。三丁目のローズ美容室。

信子 やだ。聞き間違えちゃった。

夏江 うちの亭主に貢がせた小悪魔よ！

信子 「小悪魔」っていうより「がらっぱち」って感じよ？ 今日始めて知ったけど。

明美 あ、大丈夫。ちよつと赤ちゃん動いただけだった。

川上 (ホツとして) よかった。ヒヤつとしましたよ。

明美 ……んん？ (再びおなかを押さえて険しい顔)

川上 ええ？

夏江 今朝うちの店に買い物に来てさ、「母が好物なんですう」とか言って、みかんひと山せしめてったのよ。

信子 ……。 「貢がせた」って、みかんのことなの？

夏江 ひとつくらいならまだしもひと山は許せない！ なにが「出血大サービス」

だよ、あの馬鹿亭主。「やっぱり美容師さんは普段からきれいにしてるなあ」なんて鼻の下こーんな伸ばしちゃって！

信子 ……。

明美 (晴れやかに) やっぱり大丈夫だ。

花子 (お菓子を持って出てきて信子たちに) あら、内緒話？

信子 ううん。なんか平和な話。

花子 お赤飯もうすぐですから。(テーブルへ) はい。お待ちかねの「ぼんぼり」です。

由香 いただきます。

そこへ「ごめんください」という声とともにスーツ姿の男が入ってくる。

男 大友物産の者ですが。

明美 (立ち上がり) まあ、いらっしゃいませ。(奥へ) あんたー！ おみえになつたわよー！

花子 あたし、いつてきます。(と奥へ)

川上 大友物産……。

橘 なんだ。知り合いか？

川上 採用試験落ちたところです。

橘 ハハハハ。身の程知らずだな！ 川上！

由香 有名な会社なんですか？

川上 日本を代表する総合商社の最大手ですよ。

明美 少々お待ちくださいね。まあなんですかこのたびはどうも。たくさんご注文いただきました。

男 いえ。……おめでたですか。

明美 そうなんです。

男 ご無理なさらないように。

明美 ありがとうございます。そちら様もなにかお祝いごとですか？

次郎と花子が大量の品物を持ってあわて気味に登場。

次郎 どうもお待たせしましてすみません！

男 お手数をおかけしました。(明美に) 我が社の取締役の帰国祝いと社長就任挨拶を兼ねた、ちよつとしたパーティーがありました。これはそのお土産用に。(内

ポケットから封筒を取り出し）では、代金はこちらで。

明美 （中を見て）……こんなにしませんから。

男 ご祝儀とお考えください。そのように言いつかって参りました。従業員のみなさんとなにかおいしいものでも。

次郎 こりやまたお気遣いどうも……。あ、いま領収書を……！

男 結構です。

次郎 ……あの……うちの店のことは、どこで……。

男 新社長からのご指定です。内祝いの品は、あかり堂さんをお願いするようにと。

大友社長をご存じですか？

次郎 いえいえ、滅相もない。

男 そうですか……。外に車を待たせてありますので。

次郎 あ、はい！ お運びしますです。

男に続いて次郎・花子・明美は店の外へ。

川上 「ご祝儀とお考えください」……なんかかっこいいなあ。

橘 なんだ、物まねか？ おまえほんとに面白いやつだな。

夏江 やっぱり一流どころのサラリーマンは物腰からして違うわね。

信子 ほんとね。あたし、サラリーマンなんて川上さんくらいしか知らないから。

由香 あたしは全然タイプじゃないですね。ああいうお硬いのは。

信子 あら、由香ちゃんのタイプってどんなの？

由香 （夏江に気づき）あ！ 今朝はありがとうございました。

夏江 （懇懃に）いーえー！ お礼なら主人にどーぞ！ お母様お喜びになりました？

由香 喜んでると思います。ちゃんとお供えしましたから。

次郎、花子、明美、そして政春が次々に入ってくる。

次郎 いやあ、参った参った。ちかれたびーだよ。

花子 なんか緊張しましたね。

明美 (封筒を覗き込みながら) すごいよ、花子さん。なに食べに行く？ お寿司？
うなぎ？

次郎 「ちよつとしたパーティー」に紅白まんじゅう八百個か……。わからねえなあ、金持ちの世界ってのは。

政春 まったくですよねえ。

夏江 ……お母さん、お亡くなりには？

由香 はい。あたしが小学校入ってすぐに。父は再婚したんですけど…… (別人の
ようなどすのきいた声で) それがとんでもねえ意地悪ババアで。

川上 (やや怯えながら) 思っただけで、そんな顔つきになるほどの？

由香 とにかくひでえクソアマでしたよ！ 父親の見てない所で殴る蹴るわ蹴るわ水ぶ
っかけるわ……。 (周囲の引き具合に気づいてよそいき声に修正し) それであ
し、中学の頃から家出を繰り返すようになって。仲間とつるんで悪さ……。じゃな
くて、おいたなんかをしてるうちに、父も亡くなってしまったので、帰る家もな
いし、手に職つけて一人で生きていかなきゃって。

夏江 苦労したんだねえ。

次郎 花ちゃんのことちよつと似てるよなあ。

花子 え！ どこがですか？

由香 (鬼の形相で) 継母がクソババア？

花子 私も両親は早くに亡くしたけど、義理の母はすごく可愛がってくれましたよ。
女親には恵まれたんです。

由香 …… (淋しげに) そうなんだ……。

花子 ……お母さんのことはなにか覚えてる？ その……クソババアじゃない方の。
由香 少しだけ……。

政春 みかんがお好きだったんですよ。

夏江 ちよつとあんだ！ いつの間になにやってんのよ！

政春 迎えに来たんだよ。言っただろ？ 帰りに寄るって。

花子 じゃあそのお母さんの大事な思い出、新しい家族が出来た時に聞かせてあげなきゃね。

由香 ……出来るかなあ。新しい家族なんて。

花子 出来るわよ。雛人形と違って家族になれてる私が言うんだから間違いない！

由香 (思い出したように驚きと感心のまなざしで店先の方を見て) ……そうだよ
ね……………。

政春 ま、このご町内はみんな家族みたいなもんですからね！

次郎 お！ 八百政がめずらしくいいこと言った。

政春 人類はみな兄弟、遠くの親戚より近くの他人、遠くて近きは男女の仲、って
ね！

夏江 ブレてってるよ！

次郎 (由香に) ま、そういうことだからよ。あんたもご近所さんなら、親戚の家
だと思っちょいちょい遊びにくりゃあいさ。

明美 (次郎に) そうそう、川上さん、来月転勤なんだって。

川上 明美さん……………なぜこのタイミングで……………。

次郎 おう、そうかよ。(チラッと花子を見てから) なんだ、とうとう一方通行のま
んまで行き止まりか。

夏江 あーあ！ この人なんだ。

政春 あーあ！ これがお噂の。

川上 ……なんですか。僕のことでは回覧板でも回ってるんですか。

信子 川上さん、ここじゃあ注目度ナンバー1だから。

花子 ……川上さんがどうかしたんですか？

橘 さあ川上。花子さんには回覧板が回っていないみたいだぞ？ どうするんだ。

川上 ……お会計をします。ごちそうさまでした。

橘 川上！

川上 僕は今日ここに白玉ぜんざいを食べに来たんです。ご町内のトップニュース
になるためなんかじゃない！

由香 でも引越しちゃうんでしょ？ いいのかよ、好きだって言わなくて！

「おく」という町内の人々のどよめき。絶望する川上。
一人、きよとんとする花子。

花子 え？ なになに？ なんの話？

橘 (まつすぐに由香を指さし) キミ。たしか山本さん。よく言ってくれた。

政春 そうですよ川上さん。男は当たって砕けるですよ！

川上 ……あなた今初めて会った方ですよねえ。

明美 夏江さんのご主人よ。

川上 その夏江さんも知らない人です！

政春 ちなみに女房がおぶってるのがせがれの春光です。

川上 ああ、そうですか！ どーもはじめまして！

橘 落ちて着け川上！ なんてザマだ。あんな小さな子にそんな乱暴な挨拶をする奴があるか。(春光を見て) おまけに相手はスヤスヤ眠ってるじゃないか。目が覚めちゃったらどうするつもりだ。

政春 ああ、大丈夫ですよ。うちの子はね、おっぱいやればまたすぐ眠っちゃいますから。(夏江に) な？ (「シッ」と夏江にたしなめられる)

橘 おまえ俺に言ったよな？ 同情なんかじゃない、中途半端な気持ちじゃないんだって。あんなに真剣なおまえを見たのは初めてだった。正直俺は感動したよ。仕事のミスは多いし、酒は飲めないし、職場でお菓子ばかり食べてるへなちよこを絵に描いたようなおまえが、一人の女性を本気で愛して守ろうとしてるってわかったからだ！ なのに「白玉ぜんざいを食べに来た」だと？

明美 お決まりなのよね、川上さんの。

橘 ……川上。おまえがこのままでいいっていうなら、もうなにも言わないよ。余計なことはしない約束だからな。ただ俺は、おまえに後悔してほしくなかったんだ。知らない町で、新しい仕事場で、くよくよ悩んでほしくなかったんだよ。

次郎 いい友達持ってんじゃねえか川上、こんちくしょう。

橘 まあ、お節介な先輩から解放されてせいせいするだけかもしれないけどな……

じゃあ帰るか！ ごちそうさまでした。おいくらですか？

川上 ……待ってください！

間。

川上 ……ありがとうございます橘先輩。今日、先輩についてきてもらってよかったです。

川上、ゆつくりと花子の方を向き、こぶしにぐっと力をこめる。

川上 ……花子さん……。僕は……。あなたの……

橘 そうじゃないよ川上！（ずいっと花子の前に出て、大きなはっきりした声で）
「花子さん！ 好きです！ 僕と結婚してください！」

奇妙な間。

橘 （川上を振り返り）こうだろう。

川上 （怒りに震える声で）余計なことはしない約束はどうしたんですか……！
次郎 ……やっちゃまったな……。

政春 いや、悪気はないんだと思いますよ？

川上 だからあんた誰なんだ！

信子 どうするの？ 花子さん！

花子 どうするのって……え？ なに？ 今の誰から？

由香 （川上に）ほら！ 八つ当たりしてないでもう一回！

夏江 （子どもがぐずりだし）おーどした。びっくりしたか。お母ちゃんもびっくりしたよ。

電話が鳴る。

次郎 (出て) はい、あかり堂。……おう、こんちは。……はいよ。(受話器を離し)
花ちゃん、おつかさんからだ。

花子 なんだろ。桃子になにかあったのかしら。

次郎 いや、お雛様に用らしい。

花子 雛ちゃんに？

信子 (早速呼びに行き) 電話だってー。桃ちゃんのおばあちゃんからー。

「いま参る」という声のうちに、しずしずと雛が現れ、全員の見守る中、電話口までたどりつく。

雛 (電話に出て) おお、どうした。……ふん。……ふんふん、……それはまこと

か。よく知らせてくれたなあ。ではのちに。ごきげんよう。(電話を切り) 花子。

私は夕刻までには戻らねば。

花子 なにかあったの？

雛 四時半からの歌番組に沢田研二が出るそうさ。

由香 お雛様、ジュリーが好きなんだ。

雛 (肯き) 殿方にしてあの艶やかさは並大抵のものではない。

明美 ……花子さん……電話あいた？

花子 ……どうしました？

明美 タクシー呼んでくれる？ あ、あと荷物。

次郎 おい、おまえ……。

明美 ……産まれるみたい……。

暗転。

冷たい風の吹く境内。

コート姿の義男が、マフラーに顔をうずめるようにしてややうつむきがちに立っている。

ふとなにかに気づいたようにゆっくりと顔を上げ、その気配を感じた先を静かに見つめる。

やがて、その視線の先から、肩にショールを羽織ったひな子が息を弾ませて小走りに現れる。

ひな子 ごめんなさい、義男ちゃん。ずいぶん待った？

義男 ……。ご無沙汰しています。

ひな子 お届けものがあって遅くなっちゃった。堪忍ね。

義男 あいかわらずお忙しいんだな、ひな子さんは。

ひな子 寒いところについて冷えたんじゃない？ 向こうの通りに焼きイモ屋さんが出たから買ってきてあげようか。遅れたお詫び。

義男 お詫びなんて必要ありません。…。お雛様はお変わりないですか。

ひな子 お変わりないわよ。お人形だもの。

義男 そうですよね。

ひな子 最近じゃ、よくお豆腐なんかも買いに行ってくれるんで助かってる。義男ちゃんとデートして以来、すっかり外に出るのが気にいっちゃったみたいだね。

義男 あの時は相当はしゃいでおいででしたから。

ひな子 すくってきかた金魚が死んじゃった時には本当にしょんぼりしていたわよ。

三日も口きかないでじっとしてるもんだから、普通の雛人形に戻っちゃったのかと思っただわ。

義男 赤いべべの金魚をすくうまでは帰らないって、粘りに粘っていましたからね。

この境内の…。そうだ、ちょうどあの辺りです。「お雛様が金魚すくってる」って人だけができたんですよ。子どもたちが大勢寄って来て「お雛様、がんばれ

がんばれ！」って大騒ぎして……。なつかしいな。

ひな子 ……しばらく会わない間に、義男ちゃん、なんだか大人っぽくなったわね。

もう「義男ちゃん」なんて呼んじゃいけないかしら。

義男 僕ももう学生ではありませんから。でも、「義男ちゃん」はどうかそのままでお願います。ひな子さんが僕に示してくれる数少ない親しみの表れなので。

ひな子 そういえば、晴れて大学をご卒業だったわね。なにかお祝いしなくっちゃ。

甘いものでも食べにいきましょうか。ごちそうするわよ？

義男 ……夢のようなお誘いですが、残念ながらあまり時間がないんです。これから父の会社に行かなければならなくて。

ひな子 そうか……。さぞかしお忙しくなるんでしょうね。義男ちゃん、跡取りだものね。いろいろ大変でしょうけれど、しっかりおやりなさいね。

義男 ……やっぱりひな子さんの笑顔はまぶしいなあ……。

ひな子 「しつかりおやりなさい」って言うのは、「いつまでもそんなこと言っていないで」って意味よ？

義男 ……姉さんから、なにか連絡はありますか？

ひな子 よく手紙をくれる。ほとんど花子ちゃんのことばかりよ。ごはんをたくさん食べるようになったとか、転んでも泣かない強い子です、とか。……ただ、

ご主人が病気がちみたいだね。お貴ちゃんもあちこち働きに出ているんですって。

義男 ……大丈夫かな。姉さんだって、それほど体が丈夫な方じゃないのに。

ひな子 あたしもそれを心配してるの。あれこれ様子を訊ねて^{たず}みても「私は元気よ」って返事ばかりで……。

義男 泣き言を言うのが大嫌いな人ですからね。小学生の時も、風邪で大熱を出していたのに、それを誰にも言わず山登りの遠足に出かけたことがありました。結果、肺炎を起こして入院騒ぎですよ。

ひな子 最近、手紙の文字も中身も、どこか弱弱しい感じがするのよ。

義男 姉さんは時々ほんとうに馬鹿だからなあ。娘がかわいい余りに、また無茶を
しているのかもしれない。

ひな子 ……やっぱりなにか変よ。だってね、近頃寄こす手紙には、最後に必ず「ひ

な子に会いたい」って書いてあるの。

義男 「ひな子に会いたい」……。

ひな子 そうよ。「ひな子に会いたい」「ひな子の作ったひなあられと一緒に食べた
い」って。義男ちゃんじゃあるまいし、お貴ちゃんがそんなこと言うなんておか
しいと思わない？

義男 ……ひな子さんは、僕たち姉弟きょうだいの心の支えなんです。たとえどんなに遠く離
れていても。

ひな子 ……あたし、近いうちにお貴ちゃんのところへ行ってみようと思う。取り
越し苦労かもしれないけれど、そうであってほしいけれど……。ねえ義男ちゃん、
一緒に行かない？ あなただって、お姉さんの顔を見て安心したいでしょう？

義男 姉さんにも会いたいし、なによりひな子さんから旅のお供に選ばれるなんて、
天にも昇る気持ちですが……

ひな子 お貴ちゃん言ってたじゃない。いつか姪っ子に会いにいらっしやいって。

義男 日本を離れることになったんです。

間。

ひな子 ……誰が？

義男 もちろん僕です。アメリカに行くのが僕ではなく父だったらどんなにいいか
と思います。

ひな子 アメリカ……？

義男 「海外修行」という名目ですが、実際は海外業務拡大のための基盤づくりに
従事します。帰国はいつになるかわかりません。結果を出すまで、日本の土を踏
むことはあいならんと言われていますから。

ひな子 ……出発は、いつ？

義男 来週です。ひな子さん。好きです。僕と結婚してください。

ひな子 ……。

義男 ……という言葉、僕は口がすっぱくなるほど言いました。

ひな子 耳にタコができるくらい聞いたわ。

義男 でも一度もこたえてくれなかった。

ひな子 ……こたえちゃったら、もう言ってもらえないでしょう？

義男 言いますよ！ なんだったら結婚してからだって……！

ひな子 ごめんなさい義男ちゃん。冗談よ。

義男 ……ひどい人だなあ、ひな子さんは……。

ひな子 そうよ。だからもうあたしのことなんかお忘れなさい。

義男 ……でもいいです。僕はこれから、いつもこの神社のことを思い出します。

ひな子 早く素敵なお嫁さんを見つけてなさい。

義男 ここで、大勢の人が見ている中で、お雛様の着物の袂たもとが濡れないよう必死に

押さえたことと……

ひな子 立派な大人にならなきゃダメよ。大きなお仕事をするんですもの。

義男 さつきひな子さんが、僕のために走って来てくれたことを思い出に、

つらく淋しい外国暮らしを耐えていきます。

ひな子 ……元気だね。

義男 待っていてくれなくてもかまいませんが、いつか必ず迎えに来ます。

ひな子 元気でいてね義男ちゃん。約束よ？ お返事は？

義男 ……はい。……姉さんのこと、どうかよろしくお願いします。(深々と頭を下

げる)

ひな子 大丈夫。約束する。

5

2場の数時間後。

広大な庭の一角にある東屋にいる桃子・桜子・あきら・春光・雛の五人。

桃子がおどろおどろしく物語を聞かせている。

桃子 それでね、イザナギは死んじゃった奥さんが恋しくて黄泉よみの国まで迎えに行
くわけ。そしたらイザナミが出てきて「じゃあ帰っていいかどうか黄泉の国の神
様に聞いてくるから、その間、決して私を見ないでくださいね」って言ったのね。
でもあんまり長い時間待たされたもんだから、イザナギはどうとう……

あきら 見ちゃったの!?

桃子 (肯き)そこにはイザナミの死体が……

あきら いやーっ!

桃子 数え切れないほどのウジ虫が這いまわる体中からは、雷神が湧きだして(大
声で)ゴロゴロゴローツ!

あきら いやーっ!

桃子 そしてただれて歪んだ顔をイザナギに向けると「……われに恥をかかせおっ
て……」

あきら やめてーっ!

桃子 怖くなったイザナギが一目散に逃げ出すと、イザナミは恐ろしい化け物女た
ちとともに後を追いかけてきて(ほとんどあきらに襲いかかるように)「おまえ
の国の人間を一日千人殺してやる!」

桜子 (気を失いかけているあきらに)あきらちゃん、白目! 白目出ちゃってる!

桃子 ……ってなんの話をしてたんだっけ?

雛 なぜ桃が厄除けになるのかという話である?

桃子 そうだそうだ。それで、桃の実を投げつけたら化け物たちが逃げ去ったから、
イザナギはその桃の実にこう言ったわけ。「私を助けてくれたように、この国の
人間たちがつらく苦しいめにあっているときは助けてやってほしい」ってね。は
あ。肝心なところ抜かしちゃったよ。

あきら ……古事記ってそんな怖いお話だったの?

桃子 (再びおどろおどろしく)それでもイザナミはなお追いかけてきて、(さらに
迫力を増して襲いかかるように)「千人殺してやる!」

あきら いやーっ!

春光 ……イザナギってのは、ダメな男だな……。

桃子 春光く。この国を作った神様つかまえて「ダメな男」はないでしょうよ。

春光 未練がましく奥さん追いかけてつたくせに、約束破って逃げ出して、おまけに桃を投げつけたんだろ？

桜子 あー、まあそう聞くと確かにね。

春光 桃は……メロンの次ぐらいに高いのに。

雛 さすが八百屋の息子はもの見方がちがうなあ。

春光 最低だよイザナギ。……俺とおんなじだな……。

桃子 そんなことないよ。だってイザナギは、「一日千人殺してやる」ってイザナミに言われた時、「ならば私は一日千五百の産屋うぶやを建てよう」ってちゃんと対策練って言い返したんだから。あ、産屋って、赤ん坊を産む建物のことね。

春光 じゃあ最低なのは俺だけか……。

桜子 お姉ちゃん。イザナギの方じゃなくて春くんフォローしなよ。

雛 なにをそんなにしよげておる春光。せっかくの綺麗なおべべが台無しではないか。

桜子 ……彼女に振られちゃったんだって。

桃子 いつまでも就職決まらない人にはついていけないんだってさ。

あきら 春光つちゃんは最低なんかじゃないわよ！ 今、就職氷河期なんだって、こないだニュースで言ってたもん！ そんなこという彼女の方がどうかしてるのよ！

桃子 そうだそうだ！ そういう女にはメロンを投げつけてやれ！

春光 ……そんなことしたらかあちゃんに殺される……。まあ、それもいいか。俺みたいな息子、いない方が……

雛、春光の頭をげんこつでポカリと叩く。

春光 いてえ……。

雛 もう一度そのようなことを申してみよ。今度はげんこつではすまさぬぞ。

桃子 ひいちゃんが怒った……。

雛 おまえは、自分がどれほど慈いつくしまれて育ったのかをちいともわかっておらぬよ
うだ。己おのれを粗末にすることが、まわりの者の心をどれほど痛めるか気づかぬうっ
け者よ。

桜子 (桃子に) 「うつけ者」 ってなに？

桃子 馬鹿のことだね、簡単にいうと。

春光 ……だから、俺なんかいつそのこと……。

あきら そんなこと言っちゃダメー！

雛、袖をまくりあげ、春光の頭に肘落としをくらわす。

春光 ……いってえ……！

雛 げんこつではすまさぬと申したろうが。

春光 どこで覚えるんだよ、そんな技……。

桃子 昨日プロレス中継見てたよ、そう言えば。

雛 卑屈ひくつなものいいは慎まぬか。そのような心持こころもちでいる限り、おまえのことを必要
とする女子おなごや勤め口などいずこを探してもないと思え。

桜子 あー、ひいちゃん！ 今それ言っちゃあちよつと……。

雛 ないものをないと申してなにが悪い。

あきら 大丈夫？ 春光ちゃん！ 心折れてない？

桃子 折れたでしょー、今のはポツキリと。

雛 (しゅんとしている春光を見て) ……男の子のお守りは専門外だが、綺麗なべ
べに免じて出血大サービスとしよう。(春光の前にしゃがんで言い含めるように)
春光 おまえのことは、ややこの頃からよく知っておる。昔も今も、おまえが
ご両親の大事な宝であることを忘れてくれるな。春の光とは、なんとも温かなよ
い名ではないか。その名に負けない明るく元気な春光に早く戻るがよい。わかっ
たな？

春光 ……。

雛 返事は。

春光 はい……。

雛 （立ち上がって春光の頭を撫でてから） やれやれ。大事な桃の節句に二度も手をあげてしもうた。ちと頭を冷やして来よう。

雛、退場。それを見送るようにしながら高月が入れ違いに現れる。

高月 お楽しみいただいていますか？

桃子 う〜ん、（メンバーの顔を見渡し）微妙かな。

高月 お雛様、どうかされました？

桜子 あ、お散歩に行っただけです。

あきら 広いお庭ですよねえ。お雛ちゃん、迷わないかしら。

高月 （雛の去った方を見やって）……あれは、バッテリーかなにかで動いているんですか？

桜子 特にそういったカラクリはないんですけど……。

高月 さようでございますか。

あきら ……高月さんて、若いのにすごく落ち着いてますよね。なにかに驚いたりすることってあるんですか？

高月 そうですねえ。ドレスを着た男性が、雛人形にエルボー・ドロップを決められたりしているのを見ると、まあ多少びっくりしますね。

桃子 びっくりしてるようにはまったく見えませんけどね。

高月 多少ですから。

桜子 会長さんのお加減、いかがですか？

高月 やはり体調がすぐれないようで、ご招待しておきながらたいへん失礼かとは存じますが、ご挨拶は控えさせていただきたいと。

桃子 そうですねー。ちゃんとお礼が言いたかったのになあ。

あきら ほんとうは桃ちゃんちが家族でご招待されたのよね？ あたしなんかお邪魔しちゃってよかったのかしら。

高月 しつこいようですが、お友だちでもお人形でも気心の知れた方をどうぞ大勢

おつれくださいとのことでしたから。問題なのはお楽しみいただけただかどうかです。(あきららに) お食事の時、悲鳴をあげていらしたようですが、なにか不手際でも？

あきらら ごめんなさい。あんなごちそう食べるの初めてだったので……。

高月 「うれしい悲鳴」と理解してよろしいですか？

あきらら ……結構でございます。

桃子 すごかったよねー、あの大きいはまぐり！

春光 それよりもデザートに出た苺だよ……。

あきらら 美味しかったねー。丸くて可愛かったし。

春光 幻の高級ブランド「ももいちご」だった……。徳島県の超限定生産品で市場しじょうじゃめったにお目にかかれないんだ。あの大きさだと一粒で千円はくだらないんだぞ。

あきらら うそー！ あたし一万円以上食べちゃったかも！

桃子 「ももいちご」か……。名前がいいやね。

桜子 ……春くんさあ、就職活動なんかやめて八百政継げばいいんじゃない？

春光 ……なんでだよ。

桃子 そうだよ。イザナギが投げた桃の値段気にしたり、幻の苺にやけに詳しくかったり、あんたどう考えたって八百屋が天職だよ。

春光 俺は……ただそういうもんが身近にあるからちよつと気になるっただけで、神様仏様好きが高じて仏壇屋で働いてる桃子とはわけがちがう。

桃子 おんなじだって！ あんた果物とか野菜の匂い好きでしょう？ 子どもの頃、よく店先で嗅ぎまわっておばさんに怒られてたじゃん。あたしもお線香の匂い大好き。好きなものにかこまれて仕事するの最高だよ？

桜子 お姉ちゃん、ほんと好きだよね。お線香とかロウソクとか。

桃子 なーんか落ち着くんだよねー。

あきらら そうよ、春光っちゃん。昔お店屋さんごっこしたみたいに、またみんなと同じ商店街で働くなんて楽しいじゃない。

春光 そんな遊び半分で家業なんか継げるかよ！ ああ見えて八百政、八十年も続

いてんだぞ？

あきら 春光つちゃんなら大丈夫よ。あたしだって、「あかり堂」の四代目めざして今パパから和菓子の作り方をいろいろ……

春光 だっておまえは他に就職口なんて……！

桃子 春光っ！

間。

春光 ……ごめん、あきら……。

あきら ……。

春光 ……。ごめん……。

高月 就職先をお探しなら、会長に頼んでみてはいかがでしょう。

桜子 ……はい？

高月 大友物産率いる大友グループの総社員数は二十万人を優に超えていると聞いております。スカートを履いた男性社員を一人や二人紛れ込ませることなどわけないと思いますが。

桜子 いえ、あの、春くんに関しては、スカート履いてるのは今日に限ったことでして……。

あきら ……あたしは……パパの和菓子好きだもん……。季節のお花とか風景とかに見たてて作るお菓子、すごく綺麗だし、かわいいし、自分にも作れたらなっただずっと思ってたんだもん。

桃子 あきらはきれいでかわいいものが大好きだもんね。

あきら (こくりと肯き) だからあたしは、遊び半分なんかじゃないし、逃げてなんかない。……逃げてないもん……。

高月 ご家業と希望のお仕事が一致しておられてなによりです。春光さまはどうなさいますか？ ご要望があれば、相応の手配をいたしますが。

春光 ……俺は……逃げてるけど……。

桃子 認めちゃったよ。

春光 けど……。

高月 これもなにかのご縁とお考えになってみては。

春光 ……ご縁は、なかったんだと思う。大友物産、書類審査で落とされてるし……。

桜子 あらら。

春光 振られた相手に未練がましくすがりつくような真似は、もうしたくないんだよな。

高月 それはさしでがましいことを申しました。

桃子 よく言った春光！ スカート履いてるけど男らしいぞ！

春光 ……スカート履いてなかったらすがりついてたかもしんねえ……。

桃子 身をもって知ったか！ 女子じょしの強さを！

あきら でも、それでこそいつもの春光ちゃんよ。

桃子 ね！ あきらも惚れ直したんじゃない？

春光 ……は？

間。

あきら 桃ちゃん、ひどーい！（と泣き崩れる）

桃子 ごーめんごめん！ あ、春光。今あたし、あきらのことなんてひとつ言も言っていないから。（あきらに）ね！ ほら、急いで取り消したよ？

あきら もう遅い！

桜子 ……お姉ちゃん……。

高月 ……。（表情ひとつ変えず、足早に退場）

桃子 そんなことないよ。（春光に）そんなことないよね？

春光 ……なに、あきら。おまえ……俺のことが好きなの？

あきら ほらっつ！

桃子 こら！ 春光！ あんたデリカシーってもんがないの？

桜子 どの口が言ってたんだか……。あのさ、春くん。出来れば聞かなかったことに

してあげてくれない？

春光 なんで？

桜子 な、なんでって……。

あきら だって……笑われるか、気持ち悪がられるだけだもん……。

春光 びっくりはするけど、笑われたり気持ち悪がられたりっていうのは……（自

分の服を見て）今日の俺の方だろう……。

桃子 だんだん見慣れてきたけどね。

春光 えーと……。つきあうのはムリ。

あきら ……わかってる。

春光 それはあきらがほんとは男だからってんじゃないで、だっておまえ、桃子と

か桜子なんかの百倍は女らしいし。

桜子 おっしやる通りです。

春光 そうじゃなくて、子どもの頃から知ってるし、あきらのことは、男だけど妹

みたいにしか思えないんだよ。だから、彼氏はムリだけど、今までどおりの幼な

じみじゃダメかな。

あきら ……いい……。

春光 近所の仲良しの兄ちゃんでもいいかな。

あきら ……全然いい……。

桃子 ちょっとあつかましいんじゃないの？春光。あきらは別にあんたにつきあっ

てほしいって告白したわけじゃないんだからね。

桜子 お姉ちゃんがバラしただけだからね。

春光 俺振られたばかりで傷ついてんだぞ!? ちょっとぐらいは思われる側の

気分を味わったっていいじゃないかよ!

そこへ高月が大きな花束を抱えて素早く戻ってくる。

高月 ああ。おさまりましたか。

桃子 どうしたんですか、それ。

高月 あきらさまはお花を見せると泣きやまれるようですので、エントランスの花
瓶から引っこ抜いてきたのですが。

桜子 (屋敷の方を見て) ……あの距離を、このタイムで？

高月 お楽しみいただくためでしたらこのくらいのことは。まあせっかくですから
どうぞ。(と、あきららに花束を差し出す)

あきら ありがとうございます…。お花、すごくきれい……。

桃子 高月さんて、なんか……人間ぽくないですね。

高月 バッテリーで動いています。

春光 マジで!?

高月 冗談です。

桜子 (脱力) ……いま全員真に受けたと思いますよ？

高月 よく言われるんですよ。ロボットみたいとか、ターミネーターっぽいとか。
今回の転職もそれがきっかけだったようで。

あきら 以前はどんなお仕事をされてたんですか？

高月 病院の受付です。愛想がなく融通がきかないのを理由にクビになりかけてい
たところを、こちらの会長が「人形っぽいところが気に入った」とおっしゃって、
今年に入ってからこのお屋敷勤めに。

春光 変わった人なんだな。会長さんて。

あきら 桃ちゃんたちも会ったことないんですよ？

桃子 会ったこともないし、こんな大金持ちだなんてここ来て初めて知ったよ。

桜子 おばあちゃん、古い知り合いとしか言わなかったもんね？

高月 本日は御面会がかないませんが、また是非遊びにいらしてください。

桃子 春光にはかえってよかったね。そんな恰好じゃあね。

春光 桃子……。おまえが着せたんだろうよ。

桜子 ……なんかお姉ちゃんあれだね、だんだんお父さんに似てきたね。

桃子 そうかな。

桜子 うん。面倒見がいいんだかハタ迷惑なんだかよくわかんないところが。

桃子 そうかもね。不思議だね。血いつながってないのに。

あきら ウソ！ おじさん、ほんとのお父さんじゃないの？

桃子 あれ。言ってなかったっけ？

あきら 聞いてないわよー！

春光 ほんとのお父さんは桃子が生まれる前に亡くなってんだろ？

桃子 そうそう。で、お母さんが再婚して桜子が生まれたの。

あきら 知らなかったー。

春光 そういえば昔よくおじさんのこと……（大きなくしゃみ）うう寒い。

高月 あたたかいお茶をご用意させましょう。どうぞテラスの方へお越しください。

（退場）

桃子 はーい。

それぞれ移動のために退場しながら

春光 足、さみい！（あきらに）おまえよく一年中こんなカッコしてんな。尊敬するよ。

あきら 春光ちゃん、昔よく桃ちゃんたちに「おまえの父ちゃんうんこ！」って言うってたよね。

春光 うん、さつきそれ言おうと思ったんだよ。なつかしいよな。

桃子 あ、桜子。ひいちゃんがいない。

桜子 お姉ちゃん探してきてよー。あたしなんか今日くたびれた。

桃子 わかったよー。

桃子が一人残って雛を探しに向かおうとしたところ、毛糸の帽子に厚手のコート姿で、杖を支えにひっそりと立っている老紳士に気づく。

桃子 ……こんにちは。

老人 ……こんにちは。

桃子 このお屋敷の方ですか？

老人 ……庭師です。

桃子 お庭きれいですね。広くて公園みたい。

老人 ありがとうございます。

桃子 今日、なんだかよくわかんないけどひなまつりのパーティーにお呼ばれしたんで、友達つれてのこのこやってきました。

老人 楽しんでいらしてください。

桃子 はい。(ふと庭の向こうを見て) あ、いたいた。(大声で手を振りながら) ひいちゃーん！ お茶いれてくれるってーっ！

「いま参る」という雛の声。

桃子 先行ってるよー？ テラスね、テラスー！ (老人に) 待ってるよーと日が暮れちゃうんですよ。

老人 そうですか。

桃子 会長さんに、どうぞお大事になって伝えてください。あと、お招きありがとうございます。ごさいますって。

老人 伝えましょう。

桃子 そんじゃ失礼しまーす。

桃子、♪あかりをつけましょ、ぼんぼりにく と、調子っぱずれの「うれしいひなまつり」を歌いながら退場。
老人がその姿をいつまでも見送っているところへ、雛が現れる。

雛 ひさかたぶりだな。

老人、ゆっくりと雛の方を振り返る。

雛 なんだ、その残念そうな顔は。

老人 ……あなたが来るといふことは、ひな子さんは来ないってことだからねえ。

雛 たとえ身代わりでも、いつぞやのデートは楽しかったである？

老人 （桃子の去った方を見て） ……今のは ……お姉ちゃんの方か。

雛 桃子という名だ。妹は桜子という。

老人 ……会うつもりはなかったんだが、覗きに來たら見つかったよ。

雛 会って話をして見たらよい。

老人 あの子たちに、今さら名乗れる私ではないからねえ。

雛 あの子らは、貴子のことをよく知っておるぞ？

老人 ……。

雛 くりかえしくりかえし、ひな子が話して聞かせたからなあ。わずかな年月ではあつたが、貴子がどれほど花子のことを、あの子らの母親を、大切に、本当の娘のように可愛がったか。孫娘たちはよく知っておる。

老人 ……その後のことあとを知ったのは、日本に戻って来てからだつたよ。

雛 おお、そうだ。忘れるところであつた。（と袂をごそこ探り出す）

老人 ひな子さんは、私をうらんでいるかなあ。

雛 これをおまえにと預かつて参つた。

雛、小さな紙の包みを差し出す。

老人、受け取って包みを開く。

雛 干し飯を狙う鳥どもも、近頃はずいぶんと少なくなった。

老人 ……ひな子さんに、会いたいと伝えてください ……。

雛 しわくちやの婆さんになつた姿を見せたくはないそうだ。

老人 しわくちやでも梅干しばあさんになつてもいいから、一緒に、このひなあられを食べたいって伝えてください。

雛 ……では伝えよう。だから義男。男の子がそのような情けない顔をするでない。

3場から数年後の花子の家の居間。

橘と川上が話をしてる横で、花子と由香が小さな布団に寝かされた生まれ
たばかりの赤ん坊を眺めている。

由香 ちっちゃいすねー！

花子 まだ一週間だからね、

由香 あ、でもちゃんと爪も生えてる。

川上 すみません。お子さんが生まれたばかりのたいへんな時期に。

橘 こっちこそかえって悪かったな。出産祝いなんて気を遣わせちゃって。

由香 どっちに似てるんですかね？

花子 右近さんの父方のおじいさんにそっくりだって。

橘 しかし俺はうれしいよ、川上！ まさかほんとうにおまえの仲人になれる日が
くるなんて夢みたいだ。

川上 僕もまさか花子さんにお仲人をお願いする日が来るなんて夢にも思いませ
んでした。

橘 人生つてのは思いがけないことの連続だよなあ！

川上 先輩が思いがけないことを次から次に連発してるんじゃないですか。

橘 アハハハ！ 相変わらず面白いこと言うなあ、川上は。

川上 僕には相変わらず先輩がなにを面白がるのがさっぱりわかりませんよ。

花子 でもほんとにびっくりしちゃった。川上さんと由香ちゃんが結婚なんて。い
つからおつきあいしてたの？

由香 えーと、あの衝撃の代理プロポーズのあと、治つちがあらためて花子さんに
ふられたじゃないですか。

橘 なんだ川上、「治つち」っておまえのことか？

川上 ……由香ちゃん、その呼び方、二人でいる時だけって約束でしょ？

由香 それから何日かして、うちの美容室に治つちが来たんです。「失恋したからば

っさり切ってくれ」なんて乙女みたいなこと言っちゃって。

橘 川上―、男だったら床屋に行けよ。

川上 事情を知ってる人の方が頼みやすいかと思って。

由香 それであたし、「なに女々しいこと言ってやがんだ」と思って、くるくるパーマにしてやったんですよ。

橘 そう言えばおまえ、転勤の挨拶の時、へんてこな髪型してたよなあ。

由香 さすがにちよつといじわるがすぎたかなあってあたしもあとで反省して、お詫びに食事に誘ったんです。そっからですかね。転勤したあともお互い行ったり来たりしながら……まあたいていあたしが泣き言きいてやったり相談のってやったりでしたけど。

花子 よかったわね、川上さん。あたしなんかよりずっといい人がみつかった。

川上 ……。それ僕なんてこたえればいいんですか。

橘 「治っち」だって！ アハハハ！

川上 ……仲人ほんとに大丈夫かな。

由香 でもこっちだってびっくりしましたよ。結局あのプロポーズ、代理じゃなくて本物だったってことですもんね。

花子 あたしも最初はそんなつもりなかったんだけど……。

橘 俺もそんなつもりじゃなかったんだよ。ただ、女所帯はなにかと不用心だろうと思つて、時々遊びに来てるうちに、

花子 とにかく桃子がなついちやつて。

橘 「高い高い！」って放り投げてやると笑い袋みたいに笑つてなあ。

花子 そうそう。しまいには笑い過ぎて吐いたのよね。

川上 ……よかったですよ。僕には桃子ちゃんを、吐くほど笑わせることなんてとてもできなかったでしょうから。

由香 あ！ さつきね、ひさしぶりにあかり堂さんに寄つて来たんですよ。そしたらチビっこいのが一人、いっちょまえにちよこまかお店の手伝いしてて。

花子 あきらちゃん？

由香 フリフリのエプロンつけて「いらつちやいまちえ」って。

花子 かわいいでしょう？ 女の子みたいよね。

由香 将来どんなふうになっちゃうんだろ。

川上 由香ちゃん、そろそろ失礼しようか。

橘 なんだ、ゆっくりしていけよ。

由香 これから式場の下見に行くんです。

花子 花嫁衣装、なに着るの？

由香 一番安いヤツ。治っち、お金ないから。

川上 ……こじんまりした式になると思いますが、何卒よろしくお願いします。

橘 まかせとけて。えー、新郎の治っち君と、新婦の由香さんは……

川上 花子さん！ スピーチ原稿のチェック、くれぐれもお願いしますね！

奥の部屋からひな子が現れる。

ひな子 あら。白玉ぜんざいさん、もうお帰りですか？

川上 ……僕、ここではそんなふうに呼ばれてるんですか……。

花子 桃子、どうした？

ひな子 ようやくお昼寝した。絵本読むの代わってもらったのよ。雛さまの語り口の方が眠たくなるから。

橘 今日はなんのお話ですか。

ひな子 ヤマトノオロチ。

川上 ヤマトノオロチ？

橘 桃ちゃん、日本の神話が大好きなんだよ。面白いだろう。

川上 それはちよつと面白いかも。

ひな子 おかげであたしたちまですっかり古事記に詳しくなっちゃってね。

川上 じゃあ今度はそういう絵本でも買ってきますね。

橘 いいよいいよ！ 金ないんだろう？ 治っち！

川上 絵本買う余裕ぐらいありますよ。だからその呼び方勘弁してください。

ひな子 次に見えの時は白玉ぜんざいご用意しておきますよ。

橘 お義母^{かあ}さんの白玉ぜんざいは絶品だぞ！ 治っち！

川上 だから……！

と口々にいいながら三人は玄関へ。

由香 ……やさしそうなお母さんだね。

花子 やさしいだけじゃなくて強いなの？ 女手ひとつであたしのこと育ててくれたんだもの。あ、雛ちゃんもいたから女手ふたつか。

微笑みあう二人。「由香ちゃん！」と呼ぶ川上の声。

由香 はいーい！（赤ん坊に）じゃあまたね！ ばいばーい。

由香と花子も玄関へ。

「お邪魔しました」「おう、またな！」という声の後に、花子、橘、ひな子が戻ってくる。

ひな子 それで？ 桜子の名前、決まったの？

花子 ……まだだけど……お母さん、「桜子の名前」って……。

橘 いいんじゃないか、もう桜子で。

ひな子 あら、あなたたち二人でお決めなさい。桜子ってのはほら、この子がまだおなかの中にいる時に呼んでた仮の名だから。

橘 かわいい名前じゃないか。橘桃子に橘桜子。お姉ちゃんとの並びもいいよ。

ひな子 （赤ん坊に）桜子はなんて呼ばれるのがいいですかー？

花子 本人ももう「自分は桜子だ」って思ってるそうだしね……。

ひな子 （赤ん坊に）雛さまはねー「ジュリー」ってつけたいんだって。あんたどう思う？

花子 ……「桜子」にしましょう。

ひな子 あら、いいの？

花子 自分の娘を「ジュリー」って呼ぶのはかなり抵抗があるもの。

橘 よし！ 「桜子」に決定！ じゃあ桜子！ お父さんさっそく役所に届け出してくるからな！（と飛び出していく）

ひな子 なんだか悪かったわねえ。出しゃばっちゃって。

花子 ほんとはあたしももう「桜子」のつもりでいたのよ。よかった。右近さん気に入ってくれたみたいで。

ひな子 （赤ん坊に）聞いてた？桜子。おばあちゃん粘り勝ち。

花子 桃の花も桜の花も、お母さん好きだったしね。

ひな子 ……そうね。

花子 さーて桜子。桃子お姉ちゃんのとかなりでねんねしよっか！

花子、桜子を抱きあげて奥の部屋へ。

それを見送ったひな子、仏壇の前に座る。

ひな子 お貴ちゃん。あたしたちの二人目の孫、桜子ちゃんだって。いい名前です

よう。ちゃんと見てる？ このうちはね、あなたの好きだったお花たちでにぎやかよ。

暗転。

ぼんやりと灯った明かりの中に貴子の姿が浮かび上がる。

貴子 今でも不思議に思うけど、あの頃私が見ていたのは、「その先」のことばかりだった……。これから花子ちゃんはどうなるんだろう。お父さんを亡くして、そ

の上私までいなくなっちゃったら、こんなに小さな女の子がどうやって生きて行くんだろう。…幸せになってくれるかしら。好きな人ができて、結婚して、子どもを産んで、いつかはその手に孫を抱いたりする日がちゃんと来るかしらって、そんなことばかり……。でもこれって全部、私が死んだ後の話でしょう？ おかしいと思わない？ もう時間がない、残された時間が少ししかないって怯えながら、私はずっと考えていたのは、私のいない遠い未来のことだったのよ。……人間て面白いわね。自分のいなくなった世界にまで、想いを馳せることができるんだもの。……ちよつと、聞いているの？ 義男。

明かりの中に、義男の姿が浮かび上がる。

義男 ちゃんと聞いてますよ。

貴子 (ため息) なのにこの弟は……。

義男 ……僕がなんですか。

貴子 目先のことだけで終わっちゃったっていうか……。あなた姉さんのこと馬鹿だ馬鹿だって言ったけど、人のこと言えた義理なの？ 結局何回結婚したって？

義男 ……(ぼそぼそと) アメリカで四回、日本で三回……。

貴子 ……お気の毒に。

義男 何度おじちゃんになっても、ところてん式に次の結婚相手を用意されてしまつて……。

貴子 義男のことじゃないわよ。ところてん扱いされてる元の奥さんたちがお気の毒だつて言ってるの。

義男 会社のために形式だけの奥さんをあてがわれ続けた僕の方がよっぽどお気の毒です。

貴子 ……笑っちゃうわね。

義男 笑い事じゃありませんよ！ 七人分の慰謝料、いくらかかったと思いますか！

貴子 まさか本当にひな子一筋で通したなんて。

ぼんやりとした明かりをまとうようにしてひな子が現れる。

ひな子 ひさしぶりね、お貴ちゃん。

貴子 大丈夫？ 迷わなかった？

ひな子 ええ。案外近いところなのね。義男ちゃんもおひさしぶり。

義男 ひな子さん……。

ひな子 そうだ！ あたし、義男ちゃんに言いたいことがあったのよ。

義男 なんででしょう！

ひな子 大昔、あかり堂さんに紅白まんじゅう八百個も頼んだの、義男ちゃんです

よ？

義男 ……そうです……。せめてなにか少しでも、花子ちゃんの力になればと思
って……。

ひな子 あそこはね、おまんじゅうもいいけどお赤飯が美味しいのよ。お祝い事だ
つたんならお赤飯にすればよかったのに。

義男 ……。そういうことは生きてるうちに言ってくれないと……。

辺りが明るくなると、花子と橘がひとつ敷かれた布団の方を心配そうにのぞ
きこんでいる。

枕元には、雛が人形のようにじっと座っている。

そこへOL風のスーツ姿の桜子が息せき切って飛び込んでくる。

桜子 おばあちゃんは？

橘 おお、早かったな。

桜子 早退してきた。(花子に) どうなの？

花子 ずっと意識が戻らないのよ。肺炎を起こしてるみたいで、年齢が年齢だし、
万が一のこともって……。

桜子 おばあちゃん！ 桜子だよ、おばあちゃん！ わかる？

義男 (一家の様子をじっと見ているひな子に) あのー、僕に言いたいことはそれだけでですか？

ひな子 あとはそうねえ……。

義男 僕の方には、言い訳したいことが山ほどあるんですが……。

貴子 およしなさいよ、みつともない。

ひな子 あ、そうそう。もう十年も前になるけど、ひなまつりのお誘いありがとう。

子どもたちとっても喜んでた。

貴子 十年？ 義男こっちに来てからもうそんなになるの？

義男 そうですよ。医者はあと一年って言ったけど、結局桜が咲くのも見られなか

ったし、ひな子さんにも会えなかった……。

ひな子 ……ごめんね。ひよつとしてうらんでる？

義男 僕にそんな資格はありません。……ただ、「必ず迎えに来る」といった約束を、

こんな形でしか果たせない自分が情けないだけです……。

おくるみの赤ん坊を抱いた桃子と、いかにも八百屋の若旦那といったいでた
ちの春光が駆け込んでくる。

桃子 おばあちゃん、大変！ 三途の川なんてうろついてる場合じゃないよ！ 春

光が娘におかしな名前つけようとしてる！

春光 なんだだよ！「いちご」って名前、かわいいだろ？

桃子 いくら八百屋の息子だからってどんだけ果物好きなのよ。ねえ、おばあちゃ
ん！ 起きて！ 名前考えて！ 名前！

桜子 お姉ちゃん……。

花子 ちよつと桃子、そんな抱き方したら赤ちゃんかわいそうじゃない。ほら貸し
て。(と赤ん坊を引き取る)

橘 お義母さん！ ひ孫が会いに来てますよ！

春光 「いちご」って悪くないよね？ ばあちゃん！

貴子 ……にぎやかね。

ひな子 あなたの家族よ、お貴ちゃん。(義男に) 義男ちゃんも親戚よ？

義男 僕は悪くないと思いますけど。「いちご」ちゃん。

貴子 ……あの小さかった花子ちゃんが、孫抱っこしてる……。

そこへ「ひな子おばあちゃんが危篤ってほんとなの!」と叫びながら、あきらが腕を組んだ高月を引きずるようにして現れる。

桜子 はあ!?

あきら ひな子おばあちゃん! おばあちゃん言ったよね? 「一生そばにいたいと思う人ができたら、見せにおいで」って。あたし見つけたの! この人と結婚するの!

春光 マジで!?

桜子 ほんとなの? 高月さん。

高月 ええ。なんだか面白い人生になりそうなので、プロポーズを受けることにしました。

桃子 やったね! あきら!

橘 おめでどう!

あきら 高月さんはね、あたしのこと絶対に笑ったりしないの。いつもまばたきもしないであたしのこと見ていてくれるのよ? だから目を開けてよ! あたしの結婚する人見て? ねえ、ひな子おばあちゃん! あたし、お嫁さんもらうんだから。(と泣く)

花子 お母さん、聞こえた? こんなビッグニュース見逃すつもり!?

みなが口々に「おばあちゃん!」「お母さん!」と呼びかける。

ひな子 ……そろそろ行きましようか。走馬灯よりいいもの見たわ。

貴子 ねえ、ひな子。女学校の時、一緒に花壇のお世話係になったこと覚えてる?

ひな子 覚えてるわよ。あたしたち二人、じゃんけんで負けたのよね。夏休みも学校に来るのみんな嫌がつて。

貴子 でも私、ほとんどお世話出来なかったじゃない？

ひな子 仕方ないでしょ？ 病気だったんだもの。

義男 ああ。海水浴から帰って、夏風邪こじらせた時ですね。

貴子 ひさしぶりに学校に行ったら、花壇にお花のつぼみがいっぱいついてて……。

ひな子 お貴ちゃんの分もがんばったからね！

貴子 うれしかった。

ひな子 がんばった甲斐があったわ。

貴子 昔から、私ひな子に頼りっぱなしね。

義男 姉さんの恩は僕がお返しいたします。ひな子さん。ここからは僕を頼りにしてください。あの世へのエスコートという点だけが、はなは甚だ不本意ではありますが。

雛 あの世とやらへは私が参ろう。

それまで人形のようにじっと座っていた雛が立ち上がる。

が、現世の人々はそれに気付かない。

雛 ひな子。みなが呼んでおるぞ？ 耳が遠くなつて聞こえぬか。

ひな子 聞こえてはいますけど……。

雛 こたびは義男だけでなく貴子も一緒か。これはまた楽しそうだなあ。

義男 今回は、デートとはわけが違いますよ。

雛 おまえにはもう言い飽きたのでかいつまんで申すが、身代わりは私の務めだ。

その上、ひな子には恩がある。

ひな子 火事の時のことなんてもう……

雛 この数十年、ひな子とともにいたおかげで、次から次に気のいい人間たちと出会い、言葉に尽くせぬほどの愉快な思いをいたしました。十二分に楽しんだ。あの世とやらへは私が参る。おまえは、あの騒がしい者たちとながらえよ。

義男 そりゃあ僕だつてひな子さんには一日でも長生きしてほしいけど……！！

貴子 じゃあ行きましようか、雛さま。

義男 姉さん！

雛 やはり女子おなごの方が話が早い。

貴子 またね！ ひな子。

ひな子 お貴ちゃん……。

義男 ひな子さん……。

貴子 (未練たつぷりの義男を連行するように) ほら、行くわよ！ まったくあん

たは昔からひな子のことになると分別がなくなるんだから。

義男 ひな子さん！

義男、姉にひきずられるようにして退場。

雛とひな子、向かい合う。

雛 ……では、ひな子。

ひな子 雛さま……。

雛 (元気よく) バツハハイ！

ひな子 ……は？

雛 「さようなら」という意味だ。

ひな子 ……。

雛 昨晚、テレビで見て覚えた。

ひな子 ……いつの番組？

雛 ……ごきげんよう。

雛、しずしずと去ってゆく。

残されたひな子、呆然と立っている。

やがて、布団を囲む人々を眺めてから、しばし思案顔。

そしてとことことみんなの方に向かい、人々をかきわけるようにして、布団にもぐりこむ。

桃子 あ！ 目え開いた！

その叫び声の瞬間、暗転。

8

赤ん坊を抱いた夏江と、政春が現れる。

夏江は正調「うれしいひなまつり」を歌っている。

夏江 ♪あかりをつけましょ ぼんぼりに♪ お花をあげましょ 桃の花♪ 五♪

人ばやししの 笛太鼓♪

政春 (わずかに不安定な調子で) ♪今日くはたのしいひなまつり♪

夏江 ちよつとやめてよ！ せつかく正しい音程覚えさせようとしてんだから。

政春 桃ちゃんの歌、ひどかったよなあ。

夏江 実は花子さんもね、ひどいのよ。

そこへ礼服姿の明美と次郎、盛装した信子が現れる。

政春 おや！ 今お帰りですか。

次郎 おう！ 八百政。

夏江 まーこのたびは本当におめでとうございます。

政春 いやはやおめでとうございます。

明美 (深々と頭を下げ) ありがとうございます。

信子 ジロちゃんありがとね。お式呼んでくれて。

次郎 信ちゃんにはあきらがガキの頃から世話になってっからよ。

信子 (うっとり) 綺麗だったわよー、二人とも。新郎も新婦もウエディングド

レス来てる結婚式なんてあたし初めて。

明美 この人つたらね、まあ大声あげておいおい泣いちゃって。

次郎 だっておめえよ！（すでに涙声）あのあきらがよ……嫁さんもらう日が来るなんて考えた事あったか？

政春 あきらちゃんの泣き虫、お父さんゆずりでしたか。

信子 感動的だったー。泣きじゃくる新郎とその父。あとそれを能面のような顔でみつめているお嫁さん。

明美 あ、春光ちゃんと桃ちゃん、桜子ちゃんと一緒に二次会行っちゃったわよ？

夏江 もういいのいいの、あの馬鹿夫婦は。

政春 （赤ん坊に）だから今日はこれから橘さんとこでじいちゃんばあちゃんそろってごちそう食べるんだよなー？

夏江 （赤ん坊に）あんたはまだミルクだけどねー。

次郎 そう言えば花ちゃんのおっかさん、持ち直したんだってな。

夏江 そうなのよ。一時はほんつとに危なかったらしいんだけど。

明美 それはなによりだったけど……お雛様いなくなっちゃったんだって？

政春 おばあちゃん危篤の騒ぎの最中に、ふいと消えちゃったそうですよ。

次郎 あれじゃねえのか？ 人形は「ひとがた」とも言うからよ。

夏江 代わりにいっちゃったのかねえ……。

信子 （赤ん坊に）会えなくて残念だったねー、つぼみちゃん。ここにはねー、面白いお雛様がいたんだよー？

大人たちがにこにこ赤ん坊を見つめる中、ゆっくりと明かりが落ちてゆく。

おしまい。